

# 日本中國學會便り

*The Sinological Society of Japan | Nippon Chūgoku Gakkai*

二〇一四年(平成二十六年) 四月三〇日  
第一號(通卷第二十五号)



## ●目録

巻頭言

〇二 訓読と翻訳

川合 康三

〇四 洞天福地研究会について

土屋 昌明

〇六 明代文学学会(籌)第九年年会暨2013年

明代文学国際学術研討会」参加報告

松浦 智子

〇八 「韓漢語学国際学術研討会」と

「元明漢語工作坊」

竹越 孝

一〇 国内学会消息(平成二十五年)

一二 委員会報告

二三 事務局より

二四 第66回大会開催のお知らせと  
研究発表の募集

編集●神戸大学人文学研究科 釜谷武志

〒627-8501 神戸市灘区六甲台町1-1

メールアドレス: fujiwaz@lit.kobe-u.ac.jp

発行●日本中國學會

〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25 斯文会館内

ファックス: 03-3325-14853

メールアドレス: info@nippon-chugoku-gakkai.org

# 訓読と翻訳

理事  
長  
川合  
康三

論文のなかで中国の文言文を引くとき、原文、訓読、日本語訳のうちの少なくとも一つ、多い場合は三つとも挙げるのが、わたしたちの習慣になっています。以前、大学で担当していた「演習」の授業のなかでも、受講者には原文の音読に続いて、訓読と簡単な訳を要求してきました。留学生たちは初めのうちは、日本語でありながらふだん読んだりしゃべったりする日本語とは違う訓読に戸惑ったようですが、そのうちにこの奇妙な日本語をおもしろがる人も出てきました。

日本で刊行されている古典の訳注書にも、原文、訓読、訳、そして語注がかならず並んでいます。こうした訳注書はテキストをどのように読むかを示してくれる貴重な仕事です。文献を直接の材料とする古典学の場合、結局のところ、原資料をいかに正確に読むかがすべての始まりであるからです。不適切な読解から空論を立ち上げてみても何の役にも立ちません。今でこそ中国で刊行される本にも原文をいかに読むか示されるものが増えてきましたが、以前はせいぜい標点を加えるだけで、どのように読んだのかについて詳しいところはわかりませんでした。日本の訳注書はわたしたちにとってのみならず、韓国や欧米の人々に

とってもテキストを理解するうえで役立ったようです。和刻本以来の訓点の伝統を受けて、さらに現代語による訳や語注を加えたことは、日本の学界が果たしてきた功績の一つに数えられるべきでしょう。

訓読は原文を留めながら日本語としても理解できる、たいへん重宝なものです。ことに詩の場合、原文に触れるということは必須なのではないでしょうか。あっさり言い切ってしまうと、詩を外国語に翻訳して味わうことは本質的に不可能である、そういっても言い過ぎではないと考えます。最近、わたしは金起林という、数奇な運命をたどった近代朝鮮のモダニスト詩人に関する本を読みました(『朝鮮文学の知性 金起林』、青柳優子編訳、新幹社、二〇〇九)。金氏は戦前、日本に留学して日本大学・東北大学で都合七年、英文学などを学び、日本語にも堪能であったにもかかわらず、日本語では詩を書きませんでした。のちに朝鮮戦争のさなか、北朝鮮に拉致されたまま(?)消息不明となり、マルクス主義者からも韓国政府からも批判されて近年まで彼の作品を読むことすらできなかったそうです。その本は青柳優子氏による、よくこなれた詩の翻訳が三分の一近くを占め、金起林の詩の魅力をかなりの程度まで享受できたように思いました。しかしわたしが読んだのは青柳氏が日本語に置き換えた詩であって、金起林の詩そのものではない、そんな歯がゆさのこります。青柳氏の日本語が見事だからこそ一層それは「青柳氏の詩」であるかに思われ、「金起林の詩」はいったいどんなものなのか、それは壁に隔てられているような気がしたのです。

中国の古典詩について、佐藤春夫とか井伏鱒二とかの日本語への置き換えは、確かにそれだけで成立しうる詩になっていますが、それもまたすぐれた日本の詩人の筆を通して立ち上がった「日本語の詩」なのです。わたし個人についていえば、もし訓読というものがなかったら、中国の詩に興味をもつきっかけは得られなかったでしょう。訓読という、原文にそのまま触れながら日本語としても理解できる言語表現があったからこそ、中国の詩を身近なものとして受け止めることができました。それはちょっとした操作で日本語に転じうる、中国語と日本語の親近性があればこそ可能なことであり、且つまた訓読という方法を編み出し洗練させてきた先人の工夫のおかげです。

しかし訓読という便利な手段があったことは、中国の詩

を現代日本語に置き換える翻訳を停滞させることになりました。訓読で原文の趣きを或る程度味わえるわたしたちにとって、翻訳は必要なかったからです。明治以来、西欧の文学が堰を切ったように日本語に訳され、それは日本語による文学を豊かにしてきたのみならず、日本語の可能性も広げてきました。翻訳がいかに大きな貢献を果たしたかについては、亀井俊介・杵掛良彦『名詩名訳物語』(岩波書店、二〇〇五)のなかに詳しく説かれています。西欧文学に関しては翻訳はそれほど大きな意義をもっていたのに、中国の詩の翻訳といえば、巷間の訳注書の訳は「訳」というより「説明」といった方がよさそうです。それは訳者の責任ではありません。訓読をもつわたしたちにとって「訳」は必要なかったからです。実際、原文・訓読で理解できない箇所だけ訳(説明)を見る、そんなふうに使われてきたのではないのでしょうか。つまり訳には補助的な役割しか期待していなかったように思われます。

一方で漢文の訓読は、日本語のなかの一つの文体としても独立した意義をもっていました。たとえば新約聖書の文語訳は名文として知られます。最近「詩篇」も併せて岩波文庫に『文語訳新訳聖書』(二〇一四)が入りましたが、そこでいう文語訳とは訓読の日本語であって、その格調の高きゆえに日本語の古典として認められたのでしょう。和語だけで荘重な日本語の文章を書くことはむずかしい。観念的な文章も漢語あってこそ日本語で表現できる。訓読の文体を導入することによって日本語が表現の幅を広げてきたことは確かです。

しかしながら漢文調の文体は時代とともにどんどん遠ざかっていきました。日本語の変化に訓読の文体はもはや十全に対応することが困難になってきたかのようです。訓読でこそ触れることができる原文に近い味わい、などといってみても、今ではかえって理解を遠ざけるものになりかねません。ならば今の日本語に過不足なく置き換える翻訳が、中国古典の領域でも必要になってきている。漢文の文体はのこしておきたいけれども、訓読だけに頼ってはいせつかくの宝庫を敬遠する人が増えてしまう。

とはいえ、わたしたちは翻訳という作業に慣れていません。学生の時に授業で的確な日本語に置き換える訓練をされることはなかったし、教師になってからも立派な訳を求めることはしませんでした。わたしたちがすべきこと

は、できうる限り原文を正確に理解することにはかなりません。「正確に」というのは、単に語法的に間違いがないとか、書いてある内容を誤りなく受け取るとか、それだけに限りません。テキストが含んでいることばの総体を受け止める、ことばの感触や雰囲気も感じ取る、そういう広さ、深さを含めての正確さでありたいと思います。残念ながら訓読では微妙なことばの陰影はすっ飛ばされてしまいがちです。望ましい翻訳とは感性や知識や思考を駆使してつかみ取った原テキストの総体を、そのまま別の言語に移し替えることでしょうか、それは並大抵のことではありません。先日、『ヘシオドス 全作品』の翻訳で読売文学賞を受賞された中務哲郎氏は、的確な訳語一つを見つけるためにまる一日かけると新聞のインタビューに答えておられました。授賞式の間でご本人に確かめてみたら、さも当然といった感じで「わたしの先生方もみなそうでしたよ」と教えてくれました。名訳には訳者の文才に加えて、それほどの労力をかけねばならないようです。

しかしわたしたちにとっては、翻訳にそこまで力を注ぐよりも前に、正しく豊かに読む、その読み方を鍛えることの方がまず取り組むべき課題でしょう。テキストの感触までも日本語で説明できるほど、原文を読みこなす。その際、相手がことばなのですから、こちらの感性が大事な手立てになります。ことばは論理だけで解決できる代物ではない、いやむしろ手触り、肌触り、暖かみ、冷たさ、香り……そんな五感、六感のすべてを駆使してこそ理解しうるはずです。ところが、ことに論文などでは「感じ」などということは避けられる傾向にあります。確かに主観的な感じだけで論文は成立しない。しかし論文になる前の読む段階で感性は抑制すべきものでないどころか、最大限に発揮すべきであり、またそれは決して天性のものとして放棄してしまってはならず、よいテキストとよい読み方を学ぶことによって自分のなかで養っていけるはずだ、そう考えています。

# 洞天福地研究会について

土屋 昌明  
専修大学

中国では古来、各地に点在する名山を、神仙の居住する地、そこでの修行によって神仙になることのできる地として崇敬するとともに、その地は地下世界で相互に通じあったネットワークを形成している、とする考え方があり、その

ような場所を「洞天福地」と称した。このような考え方を私たちは「洞天思想」と呼んでいる。特に、5世紀半ば以降の茅山の道教では、洞天思想は中核的地位にあった。唐代には、司馬承禎(647~735)の『天地宮府図』が、十大洞天・三十六小洞天・七十二福地の体系を確立させ、玄宗皇帝はこれを信仰し、国家的な祭祀活動を行なった。さらに、杜光庭(850~935)や北宋の李思聰による発展があり、また『心史』で有名な鄭思肖(鄭所南1241~1318)では、洞天福地と身体部位との相関が展開された。その後、宋から現代まで洞天思想は継承されている。また、朝鮮半島・日本・ベトナムなどにおける東アジア的な展開もあった。日本で洞天思想を主張したのは平田篤胤である。本研究会は、このような洞天思想を研究するため、2009年から始まった<sup>1)</sup>。

この分野は、三浦國雄氏の1983年の論文「洞天福地小論」「洞庭湖と洞庭山」が先駆である<sup>2)</sup>。私たちはこの論に基

づき、思想史的研究だけでなく、宗教的な聖地に対する信仰として、具体的に研究したいと考えている。その方法として、宗教史と歴史地理学を結びつけた人文地理学の観点を導入すべく、文献研究と現地のフィールドワークを並行して行なっている。

と言ってもわかりにくいので、第一大洞天である王屋山を例にしよう。王屋山は漢代以前から名山とされていたが、古い上清經典によると、王屋山の洞窟には神仙が住み、經典が蔵され、他の洞天と通じているという。これは単なる神話であってデタラメなのか。現在の地理書によると、王屋山には洞窟があるらしい。ならば、少なくとも洞窟の存在は事実であり、洞窟を核心とする王屋山の景観が第一大洞天の根拠の一つなのではないか? こうなると、現場に行って確かめるしかない。

実地調査により、次のことが了解された。玄宗朝に祭祀が行なわれた天壇山は、本当に天壇の形をしており、そこ、洞窟が存在する峰とは広い渓谷を挟んで南北に位置し、その渓谷上の空間を介して結びついている。洞窟は3箇所あり、最上部にある洞窟は入口が5箇所あり、内部を反対側に抜けると天壇と対照する位置に立つ。つまり、巨大な渓谷全体が祭祀空間なのである。この洞窟から流れ出る泉が川となって渓谷を流れ下り、その下流に司馬承禎の清虚観がある。この景観に基づいて、歴代の地理書の記載や当時の祭祀を伝えた文献が理解できる。



王屋山王母洞(三箇所の洞窟のうちの中段)。建物の背後に鍾乳洞の入口がある

通時的に王屋山を見ると、戦国時代から三国時代までの時期、晋以後の上清經典が重視された時期、金代以降の全真教が隆盛する時期、明清から現代までの民間教派が流行する時期に大きく画期できる。現在の王屋山の天壇には、コンクリート製の楼閣が建てられ、道教の神画が掛けられ、北京の白雲観で勉強したという道士が住持している。洞窟(上段の靈山洞)には、明清以来の民間教派の神である無生老母が祭られている<sup>3</sup>。王屋山の神仙である王褒やその弟子の魏華存への信仰は今はない。ただ魏華存への信仰は、「二仙信仰」として、ふもとの河南省済源市から東辺の沁陽県に現在でも生きている。

王屋山と関係の深い第八大洞天の茅山も実地調査を行った。茅山については陶弘景の『真誥』に詳細な記述が伝わっているが、地理的記述は日本語訳を見ても理解しにくい。例えば、華陽洞天の5箇所の入口で北門の良常洞について、陶弘景はその場所を認識しているようだが、いったいどこにあるのか？ そこは、茅君が「親しく身を清めて神鬼と応答した」場所、すなわち外地から来た茅君信仰の集団が在地の信仰と接触した宗教史的に重要な場所だ。私たちはフィールドワークによって、雷平山から北に行った良常山の北陵にある洞窟がそれだと判断した。この場所とその周辺の地理景観は、陶弘景の記述によくかなっているからである。現在この場所は灌木の茂った林の中にあり、公道から立ち入るのは容易でない。洞窟は確認したもの、内部は急傾斜で、残念ながら立ち入るのは無理だった<sup>4</sup>。しかしこの定位によって、当時、許翮が最期を迎えた華陽洞北門の現場を認識し、彼が修行した洞窟(方源館)の位置と、当時の茅山への交通を担った古道のルートが類推できた。この認識は、茅山の在地の信仰と北来の人々の信仰との接点に関わり、今後の研究の参考となると思う。

本研究は今のところ、十大洞天ほかの現地を認識し、具体的な各論的問題を検討する段階で、通時的な検討や各地に散在する洞天のネットワークの問題などは、今後の課題である。例えば、十大洞天への巡礼や、洞天のネットワークが現実の道観相互の宗教的社会的な関係のメタファーである要素など、多くの検証すべき課題がある。

最後に、もう一つの問題意識を紹介させていただきたい。フィールドワークでは、往々にして道教文物と出会う

ことである。これについて本研究会は、美術史学の動向にも留意している。研究会外の方とともに、2009年に「道教の美術」展<sup>5</sup>のカタログ『道教の美術TAOISM ART』に執筆協力した。その余勢を駆って勉誠出版から道教美術の論集『道教美術の可能性』を翌年3月に出版、これを持ってパリのフランス国立美術館連合(Réunion des musées nationaux)とギメ東洋美術館(Musée national des Arts asiatiques-Guimet)の共催で行なわれた道教美術展「La Voie du Tao, un autre chemin de l'être」に出かけ、この展覧会に協力したフランスの研究者と道教美術に関する討論会を開催した。今このフランスの研究者との縁は学术交流に発展している。第1回の日仏中国宗教者研究会議「中国宗教における聖地一字宙論・地理学・身体論」を三日後に開催する予定で、てんてこ舞いしながら本稿を執筆した。

\*本研究会の活動と研究成果の一部は、本研究会のホームページおよび『洞天福地研究』と題して第4号まで印刷発行しています。興味のある方はご連絡下さい。  
連絡先：the0561@isc.senshu-u.ac.jp

- 
- 1 平成21～23年度科学研究費補助金基盤研究(B)「中国道教における山岳信仰と宗教施設のネットワークに関する総合的調査と研究」、平成24～26年度科学研究費補助金基盤研究(B)「中国道教の地理的イメージと宗教的ネットワークに関する総合的調査と研究」、ともに研究代表者は土屋昌明(専修大学経済学部)、研究分担者は、大形徹(大阪府立大学人間社会学部)・鈴木健郎(専修大学商学部)・二階堂善弘(関西大学文学部)・山下一夫(慶應義塾大学理工学部)・横手裕(東京大学大学院人文社会系研究科)。
  - 2 三浦國雄『風水 中国人のトポス』1995年、平凡社ライブラリー所収。
  - 3 山下一夫「王屋山と無生老母信仰」『洞天福地研究』第3号、2012年3月。
  - 4 廣瀬直記「蘇州句容洞天福地調査記録」『洞天福地研究』第4号、2013年6月。
  - 5 大阪市立美術館・読売新聞大阪本社共催、東京三井記念美術館、大阪市立美術館、長崎歴史文化博物館で開催。

# 「明代文学学会(籌) 第九届年会暨2013年 明代文学国际学术研讨会」 参加報告

名城大学  
松浦 智子

2013年8月25日から27日  
かけ、上海の復旦大学に  
おいて、「明代文学学会(籌)  
第九届年会暨2013年明代文  
学国际学术研讨会」が開かれ  
た。「明代文学」という大きな  
主題を掲げ、中国明代文学  
学会が主催するこの検討会  
も、「準備中(籌)」の語が外れないままではあるものの、今  
回で早くも第九回目となった。本研討会には、2006年に  
浙江大学で開かれた第四回目から参加しているが、毎回  
150人から200人前後という多くの研究者が、国内外から  
集っている。

この会が毎回盛況であることは、「明代文学」に関わる  
研究の裾野の広さを示しているようにも思われる。復旦大  
学中国古代文学研究中心、同古籍整理研究所、同中文系  
が開催担当となった今回も、中国、香港、台湾、韓国、日本  
など各地から計150名あまりの研究者が参加した。その内、  
日本の研究機関に属する参加者は14名と、海外の参加者  
の中で最も多く、日本における「明代文学」という研究対  
象への関心の高さも窺えた。日本からの参加者は、荒木  
達雄氏(東大院)、岩田和子氏(早大非常勤)、上原究一氏  
(慶應大研究員)、上原徳子氏(宮崎大)、大塚秀高氏(埼

大)、川浩二氏(早大非常勤)、川島優子氏(広島大)、金文  
京氏(京大)、顧春芳氏(大阪府立大)、小塚由博氏(大東  
文化大)、田村彩子氏(京大非常勤)、中川諭氏(大東文化  
大)、李慶氏(金沢大、以上五十音順)、および筆者である。

25日の午前、復旦大学光華樓講堂において黄霖氏(復  
旦大学)の発声により開幕式が行われると、同講堂にて  
前半の大会発言が始まった。壇上では、左東嶺氏(首都  
師範大学)、元鍾礼氏(韓国CATHOLIC大学)、中川氏、孫  
小力氏(上海大学)、周明初氏(浙江大学)、廖肇亨氏(台  
湾中央研究院)、廖可斌氏(北京大学)、陶慕寧氏(南開大  
学)、魏崇新氏(北京外国語大学)、陳慶元氏(福建師範大  
学)、張伸謀氏(徐州工程大学)、川島氏ら12人の研究者  
が、各自の研究成果を発表した(写真)。前半の大会発言に  
は、大きく二つの傾向が見えたように思われる。一つは、  
俯瞰的・総括的な見地から行う発表である。たとえば、蔣  
寅『清代詩学史』を出発点として明代文学と清代文学の関  
係について述べた廖可斌氏「談明代文学与清代文学的関  
係」や、『劍橋中国文学史(The Cambridge History of Chinese  
Literature)』の翻訳を出発点に明代文学史の新視点を紹介  
した魏崇新氏「明代文学史叙述的新視角」などがそれだ  
である。もう一つは、周曰校刊『三国志演義』の挿画に関  
する精密な比較考察を行った中川氏「周曰校刊『三国志演  
義』挿画考察」、楊維禎の書について年代考証などをした  
孫小力氏「楊維禎伝世最晩墨跡考論」、『金瓶梅』の江戸  
における受容状況について考究した川島氏「江戸時代被



大会発言の様子(於復旦大学光華樓講堂:筆者撮影)

当作“資料”究読的『金瓶梅』などのように、個別的な作品・人物に対し詳細な分析・考証を行う発表である。このうち、前者のタイプの発表は、続いて行われた分科会ではあまり見えなかったように感じられた。

分科会は、25日午後から26日午前にかけて行われた。「明代文学」と言っても範囲が広いことから、本研討会では通例、発表が「詩文」部門と「小説・戯曲」部門に大きく振り分けられる。今回も、詩文を研究対象とした論考67本を収めた予稿集「詩文巻」と、小説・戯曲を研究対象とした論考46本を収めた予稿集「小説・戯曲巻」が配布され(会場で別冊子として配られた論文も数に含むが、部数が不足し、手に入れられなかったものは含めていない)、「小説・戯曲」二会場、「詩文」二会場の、四会場に別れて発表が進められた。ここでは、筆者を含む日本からの参加者の大半が組み込まれた、「小説・戯曲」部門の発表について少し触れてみたい。

「小説・戯曲」部門に今回もやはり多く見えたのは、いわゆる「四大奇書」に関わる発表である。『水滸伝』に関わる論考4本、『三国志』に関わる論考4本、『西遊記』に関わる論考4本、『金瓶梅』に関わる論考4本と、「四大奇書」に関係するものが提出論文の約3分の1を占めた。こうした傾向はこれまでの大会にも見えており、このことは、明代通俗文学研究の中でも長い歴史と厚い層をもつ「四大奇書」研究に、依然として実に多くの未解決事項があることを示しているだろう。

これと同時に多く見えたのが、小説・戯曲の版本や版元書坊といった書誌学に関連する内容を扱った発表である。『西廂記』の多数の版本に影響を与えた金在衡(金鑾)刊『西廂記』(佚)について考察した楊緒容氏(上海大学)「秣陵金在衡刊『西廂記』: 一個重要的明善本」、大量の版本調査を通して金陵世徳堂の主人「唐光祿」について考究した上原究一氏「金陵書坊唐氏世徳堂主人考一兩位「唐光祿」」、自ら構築した小説版本比較プログラムを用いた上で『水滸伝』の二種の簡本について比較検証をした周文業氏(首都師範大学)「『水滸伝』劉興我本和黎光堂數位化研究」ほか、新知見を提示する論考が多く見られた。このことは、近年資料の公開や電子化などが急速に進展する中、小説・戯曲分野においても、以前に増して版本など書誌学に関する問題に注目が集まっていることを表しているだろう。

それをよく示しているのが、「第十二届中国古代小説、

戯曲文献暨数字化国際研討会」が、復旦大学の協力を得て、本学会終了の翌8月28日に連続開催されたということである。長年をかけ小説版本比較プログラムを構築した周文業氏が主催するこの研討会は、主に小説・戯曲の書誌に関わる問題を扱う。59篇もの論考が提出された今回の研討会では、金氏、大塚氏、中川氏、廣澤裕介氏(立命館大学)、上原氏、荒木氏など日本の複数の研究者をはじめ、黄霖氏、閔寛東氏(韓国慶熙大学)ほか明代文学会の少なからぬ参加者が最新の成果を発表した。このように、複数の成果発表の場が連携し広がることで、今後、この方面の研究がさらに進展してゆくことが予想される。

分科会を終えた26日午後、後半の大会において、黄霖氏、李騰淵氏(韓国全南大学)、閔寛東氏、胡曉真氏(台湾中央研究院)、毛文芳氏(台湾中正大学)、陳書祿氏(南京師範大学)、許東海氏(台湾政治大学)、林家驪氏(浙江大学)、厳明氏(上海師範大学)、羅時進氏(蘇州大学)、黄仁生氏(復旦大学)、査屏球氏(復旦大学)らが、発表を行った。席上では、「明清群体画像文本」という新たな枠組みをうち出し大量の絵画資料を用いながら絵画と文学の関係を論じた毛文芳氏「紀実・虚構・複製: 明清群体画像文本の三重觀看与近世化趨向」や、詳細な版本調査をもとに『千家詩』の明代における受容を宮廷から民間まで幅広く検証した査屏球氏「由流行読物到文化經典再到戲化語料—論“謝枋得『千家詩』”在明代的流行」など、膨大な資料調査をもとにした精密な発表が続いた。

後半の大会発言の後に行われた閉幕式では、明代文学学会の役員を引き継ぎ・交代が発表され、今後の展望が述べられた。また、翌27日には、嘉定への「考察」が生まれ、嘉定孔廟などを参観することができた。

三日間にわたり行われた研討会は、開催担当の復旦大学の丁寧な対応もあり、今回も活気溢れるものとなった。日程の事前通知などが遅れ気味であったことや、現在の国際政治背景にかなり影響された発表がごく一部でなされたことなど、学会の課題とすべき点もやや見えたが、「明代文学」に関わる研究者が各地から集い情報・意見の交換を行える場が設けられたことの意義は大きいと言えるだろう。国を超えた研究交流が今後も継続・促進されることを切に願うとともに、会の開催に奔走して下さった関係各位に篤く御礼申し上げたい。

# 「韓漢語言学国際学術研討会」と 「元明漢語工作坊」

神戸市外国語大学  
竹越 孝

2013年8月30日から9月1日までの3日間、中国・杭州の浙江大学において「韓漢語言学国際学術研討会」と「元明漢語工作坊」が開催された。前者は中国語学の朝鮮資料を主題とする会議で今回が5度目、後者は元明時代の中国語を

めぐる研究動向や問題点などを報告し合う1回性のワークショップである。この二つの会議については、既に浙江大学漢語史研究中心のウェブサイトにて報告が掲載されている(<http://www.hanyushi.zju.edu.cn/>)ので、詳細はそちらに譲り、ここでは主として今回の二つの会議が開催された背景と、それに付随した活動について紹介してみたいと思う。なお、以下の内容は青山学院大学の遠藤光暁氏が書かれた「先進国としての韓国—中国語学研究を通して見る」(『東方』346号、2009年12月)と重なる部分があるが、本稿ではその後の状況に重点を置いた形で述べることにしたい。

まず、「韓漢語言学」会議は朝鮮漢字音や『老乞大』・『朴通事』など、朝鮮半島由来の中国語学資料に関心を有する日本・韓国及び中国の研究者の集いであり、遠藤氏と韓国の嚴翼相氏の尽力により設立されたものである。2005年3月に嚴氏の勤務校であるソウル・漢陽大学校で第1回が開

催され、以後2年に1度のペースで、第2回は青山学院大学(2007年6月)、第3回は中国・山東大学威海分校(2009年9月)、第4回は台湾・国立中山大学(2011年5月)と開催されてきた。それぞれのプロシーディングスとして、いずれも嚴・遠藤両氏の主編になる『韓国的中国語言学資料研究』(2005年11月)、『韓漢語言研究』(2008年2月)、『韓漢語言探索』(2010年4月)、『韓漢語言探討』(2013年8月)の4冊が刊行されている(発行はすべてソウル・学古房)。なお、第3回までの会議の名称は「韓日」・「日韓」あるいは「中韓日」を冠した「中国語言学国際学術研討会」であったが、第4回から主題をより明確に反映する「韓漢語言学」が用いられるようになった。これは、この分野の先達である姜信沆氏の名著『韓漢音韻史研究』(太学社、2003年)に倣い、第2回の会議用に「韓漢語言学資料研究文献目録」(遠藤光暁・伊藤英人・竹越孝・更科慎一・曲曉雲編、『韓漢語言研究』所収)を編んだことが発端である。

今回の開催校となった浙江大学の漢語史研究中心は、中国語史、ことに語彙史研究の分野における世界的な拠点の一つであり、年に1度『漢語史学報』を編集発行するとともに、近年では、過去100年における中国語語彙史研究の成果を網羅した「今訓彙纂」プロジェクトを強力に推進していることでも知られる。開催準備を担った同大学の汪維輝氏は、『朝鮮時代漢語教科書叢刊』(中華書局、2005年)の編者として、中国でこの分野の研究を牽引してきた人物の一人であり、この会議には第3回から参加されている。汪氏が中心となって編んだ『朝鮮時代漢語教科書叢刊続編』(汪維輝・遠藤光暁・朴在淵・竹越孝編、中華書局、2011年)は、この会議が生んだ成果の一つと言える。

第5回となる今回の会議には、日本から遠藤氏と筆者の他に、伊藤英人(東京外国語大学)、吉池孝一(愛知県立大学)、小嶋美由紀(関西大学)の各氏、韓国から嚴氏の他に、朴在淵(鮮文大学校)、曲曉雲(光雲大学校)、崔宰榮(韓国外国語大学校)といった方々、中国では汪氏と共に漢語史研究中心の運営を担う方一新・王雲路両氏の他、南開大学の曾曉滄氏など、また台湾からも高雄師範大学の王松木氏が参加され、2日間で韓漢資料の音韻・語彙語法・文字の各分野にわたる計19本の発表が行われた。この会議のプロシーディングスも、2年後の刊行が予定されている。

その翌日に行われた「元明漢語工作坊」は、2010年の5月に朴在淵氏の勤務校である韓国・牙山の鮮文大学校で

開催された「清代民国時期漢語國際學術研討会」の後を継ぐ形で、一つ時代をさかのぼったものである。

「清代民国」会議は遠藤氏の構想になるもので、この時期の中国語に関わるすべての領域、即ち中国本土の戯曲や小説はもとより、唐話資料、琉球資料、西洋資料などの域外資料から呉語、閩語、広東語などの方言資料までを一望のもとに収めようとする壮大な試みであった。会議のプロシーディングスとして、『清代民国漢語研究』(遠藤光暁・朴在淵・竹越美奈子編、学古房、2011年)が刊行されているが、より大きな成果は、約15名が分担して編んだ『清代民国漢語文献目録』(遠藤光暁・竹越孝主編、学古房、2011年)であろう。700頁に迫る巨冊の内容は、本土資料(山田忠司)、官話・国語資料(千葉謙悟)、滿蒙漢資料(竹越孝・更科慎一)、唐話資料(奥村佳代子・岩本真理)、日本近代漢語教材(氷野善寛・氷野歩)、琉球資料(石崎博志)、西洋資料(石崎博志・塩山正純・千葉謙悟)、北方語資料(千葉謙悟)、呉語資料(三木夏華)、客家語資料(田中智子)、閩語資料(三木夏華)、粵語資料(竹越美奈子)、外来語(陳力衛)等であり、十全とは言えないまでも、各分野における研究状況の見取り図を得るための重要な礎石になったものと信じる。

今回の元明漢語ワークショップでは、「韓漢語言学」会議に参加したメンバーに、千葉謙悟(中央大学)、荒木典子(首都大学東京)の両氏も加わり、中国・韓国側の参加者も交えて、研究史の概観と個別的研究からなる計10本の発表が行われた。今回もまた、会議の準備に並行する形で目録の編纂を行い、「元明漢語文献目録(稿)」として予稿集に掲載している。その内容は、元代音韻(遠藤光暁)、八思巴文字資料(吉池孝一)、明代音韻(更科慎一)、語彙語法・

歴史資料(竹越孝)、語彙語法・戯曲小説(干野真一)、西洋資料(千葉謙悟)、方言資料(三木夏華)であり、現在はこの夏に中国で『元明漢語文献目録』を出版することを目指して、それぞれの分野で増補改訂を加えているところである。

筆者が概観を担当した語彙語法分野の研究史において中心となるのは、やはり故太田辰夫氏の業績である。中国語訳された『中国語歴史文法』(蔣紹愚・徐昌華訳、北京大学出版社、1987年初版)が中国語学分野における日本人の著作としてナンバーワンの引用率を誇ることから明らかなように、太田氏の業績は中国で大変な尊崇の念をもって迎えられている。筆者が太田氏の『燕山叢録』に関する研究(『『燕山叢録』に見る明代北京語』、『中国語研究』36、1994年)を紹介したところ、中国側の出席者から、単行本になっていない論文については日本側の責任でまとめて刊行してくれないと困る、と言われたことが印象的であった。

次回の韓漢会議の開催については未定であるが、3年後には「元明漢語」から更にさかのぼった「隋唐宋遼西夏金漢語」ワークショップを日本で開催するべく準備が進んでいる。

上に述べてきた諸活動は、いずれも遠藤氏の卓越したリーダーシップに負うところが大きく、比較的小規模な形で年齢や立場に関わりなく密度の濃い討論を行うのが特徴である。この姿勢は、会議の最中に大学院生がお茶を注ぎ足して回っているのを見ると、遠藤氏がすかさず、そんなことはしなくてよいから積極的に討論に参加してほしい、と耳打ちする光景に象徴されている。こうしたスタイルが今後も国境を越えた豊かな学問的実りを育てていくことを期待すると同時に、そのバトンをより若い世代へとしっかりと受け継いでいかなければならないと考える次第である。



会議の様子



代表合影

# ❖ 国内学会消息 (平成二十五年)

## 北海道中国哲學會

◎例会

4月26日

- ・ 中國古代道家思想の萬物生成論と郭店楚簡『太一生水』  
北海道大學大学院文學研究科専門研究員 西 信康

6月7日

- ・ 王船山の先行研究の動向 文 盛載

6月21日(北海道大學大学院文學研究科特別講演)

- ・ 劉宗周の誠意説について  
山西大學哲學社會學學院講師 馮 前林

8月29日(北海道大學大学院文學研究科特別講演)

- ・ 十八世紀日本武士倫理的争議：以赤穂事件爲探討核心  
臺灣師範大學教授 張 崑將

11月8日(卒論・修論構想發表會)

- ・ 『宋本十一家注孫子』用閒篇研究～注釋に引かれた歴史  
故事を中心として～ 松島 愛
- ・ トルストイから見た老子 鈴木 瑛子

11月29日(修論構想發表會)

- ・ 佐藤一齋の『石經大學攷』について 田海 秀穂
- ・ 『戰國策』に見える「五國」の研究 猪瀬 昌

平成26年1月31日

- ・ 國際シンポジウムの開催状況  
北海道大學大学院文學研究科教授 佐藤鍊太郎

◎研究發表大會

第四十三回研究發表大會並總會

8月7日 於 人文・社會科學總合教育研究棟W308

- ・ 陽明本と船橋本『孝子傳』と『今昔物語』の比較—郭巨の  
説話を中心に— 單 夢鶴
- ・ 『護國隨筆』における仁齋學批判 趙 熠焯
- ・ 五井蘭洲の『非物篇』について 王 天波
- ・ 王夫子における『大學』理解—『讀四書大全説』を中心  
に— 文 盛載
- ・ 【特別講演】萬物一體とキリストのからだ  
北海道大學名譽教授 松川 健二  
(近藤 浩之 記)

## 北海道大學中國語・中國文學談話會

第239回 (2013年2月16日)

【卒業論文發表會】

- ・ 梁祝故事における女性像—祝英台の父親から見て  
植村みなみ

- ・ 『封神演義』における申公豹の人物像について  
谷内 望實

- ・ 中國人日本語學習者の所謂「濁音化」とその發生條件に  
ついて 前田 唯

第240回 (2013年3月16日)

- ・ 漢語古今詞義漫談 方 一新

第241回 (2013年8月26日～28日)

8月26日

- ・ 「満洲国」の戦後処理—「蕭軍文化報事件」の一側面  
岡田 英樹

- ・ 『圖畫日報』掲載の探偵小説「羅師福」について—清末に  
おける醫學と探偵小説の交差路から 藤井 得弘

8月27日

- ・ 一九四〇年代の沈從文における“夢”と“現実”—「夢  
與現實」(一九四〇)、「摘星録」(一九四一)、「看虹録」  
(一九四三) 今泉 秀人

- ・ 「黒猫警長」の圖像學 加部勇一郎

8月28日

- ・ 海派舞臺と老生の形象 藤野 眞子
- ・ 門外乳談—素人の〈おっぱい〉談義 武田 雅哉

第242回 (2013年11月9日)

【修士論文中間報告會】

- ・ 吳趸人小説における買辦の形象 商 磊
- ・ 魏晉南北朝における男色文學の性格 倉 雅晨

刊行物

『饕餮』第21號(2013年9月)

『火輪』第33號(2013年3月)・第34號(2013年9月)

『連環畫研究』第2號(2013年3月)

(藤井 得弘 記)

## 秋田中国学会

例会

◎秋田中国学会平成25年度春季第156回例会

平成25年(2013)5月18日(土) 於 秋田大学総合研究棟2階講義室

・春秋の筆法と中国文明の思考法—春秋経の作経メカニズムの解明を通して— 吉永 慎二郎

◎秋田中国学会平成25年度秋季第157回例会

平成25年(2013)10月13日(日) 於 秋田大学3号館344講義室

・「道徳教育」の視点を踏まえた漢文教育—漢文教材から生き方を考える—  
(日本中国学会第65回大会・漢文教育部会の研究発表を兼ねるものとして) 秋山 恵美  
(吉永慎二郎 記)

## 東北シナ学会例会

◎2月例会 2月15日

(卒業論文・修士論文発表会、中国思想・中国文学分野のみ抜粋)  
[卒業論文発表会]

・中国文学と書家—文学から見る王羲之についての一考察 茂林 友紀

・『太平広記』畜獣の部について—中国古代小説に描かれる動物たち 中山 大地

・程明道の万物一体の仁について 浅利 真行

[修士論文発表会]

・曹植に関わる伝記、伝説の研究 劉 瓊

・唐代における「歌詩」概念の研究—中唐の白居易、元稹、韓愈を中心として 楊 猛  
(高戸 聡 記)

## 東北大学中国文学談話会

平成25年度 第1回中国文学談話会

[卒業論文構想発表会]

8月3日

・陸機「擬古詩十二首」の独創性についての一考察 佐々木千晶

・李白の詩における直喩表現について 志田奈津実

・「李徴」と「人虎伝」の差異について(仮) 尾崎 希海

・松尾芭蕉『奥の細道』における杜甫との関わり

庄子 美央

8月10日

・『水滸伝』における序列の決定要因と意味 熊谷 絢子

・映画『さらば、わが愛／霸王別姫』の解釈の可能性

白田 涼太

・翻訳漫画を通してみる日本語・中国語のオノマトペ—『毎日かあさん』を題材として— 小松 みか

平成25年度 第2回中国文学談話会

[卒業論文中間発表会]

11月15日

・李白の詩における比喩表現について—直喩を中心に— 志田奈津実

・『水滸伝』研究—物語内で規定されている登場人物の序列を中心に— 熊谷 絢子

・映画『さらば、わが愛／霸王別姫』の解釈の可能性

白田 涼太

11月16日

・陸機「擬古詩十二首」の独創性についての一考察

佐々木千晶

・「李徴」と「人虎伝」—テキストの変容をめぐる—

尾崎 希海

・杜甫が松尾芭蕉に与えた影響について—『奥のほそ道』を中心に— 庄子 美央

・翻訳漫画を通してみる日本語・中国語のオノマトペの比較研究—『毎日かあさん』を題材として— 小松 みか

(高戸 聡 記)

## 東北大学中国哲学読書会

◎第174回中哲読書会 9月28日

・六朝期における道の体得と身体観 高橋 睦美

◎第175回中哲読書会 11月29日

[卒業論文構想発表会]

・董仲舒の思想—天と君主の関係— 堤 薫

◎第176回中哲読書会 12月19日

・『唐玄宗御注道徳真経』および『唐玄宗御製道徳真経疏』の思想について 高橋 睦美

(高橋 睦美 記)

## 筑波中国学会

### ◎例会

5月16日(木)

- ・李賀「傷心行」の「落照飛蛾舞」について 既成の詩語に対する新義の付与の方法 小田 健太

5月23日(木)

- ・陶淵明の神仙思想について 不滅への志向性 宇賀神秀一

6月6日(木)

- ・白居易「効陶潛体詩十六首並序」に於ける連作的構造 加藤 文彬

6月13日(木)

- ・朱熹の『詩』解釈と「詩序」 重野 宏一

7月18日(木)

- ・神韻詩の物語性 王漁洋の「青山」詩を中心に 荒井 礼

11月7日(木)

- ・『聊齋志異』賈奉雉考 高橋 恒輔

11月14日(木)

- ・李賀「秋来」考 現実から非現実への展開 小田 健太

11月28日(木)

- ・陶淵明「擬古」詩の研究 「擬古」詩の暁語表現について 宇賀神秀一

### ◎刊行物

『筑波中国文化論叢』第32号(10月)  
(稀代麻也子 記)

## お茶の水女子大学中国文学会

◎大会 4月27日(土)

- ・入澤達吉博士と『雲莊詩存』—近代日本知識人と漢詩— 佐藤 保

◎7月例会 7月6日(土)

- ・張愛玲研究の現在—渡米後を中心に— 鈴木 基子
- ・也斯の香港—『後植民植物與愛情』を読む— 西野由希子

◎9月例会 9月7日(土)

- ・「詠懐」と「言志」—なぜ阮籍詩群が「詠懐」と呼ばれたのか— 鄭 月超
- ・『日本閨媛吟藻』の研究 大戸 温子
- ・1950年代の凌叔華 阿部 沙織

◎12月例会 (日本中国語学会関東支部例会と共催)

12月7日(土)

- ・在句子末尾出現的副詞“都／还” 田 禾
- ・表可能的情態動詞“會”指向將來時的用法考察 鄭 文琪
- ・横浜国立大学における中国語履修者の学習方略観—学生が考える「中国語ができるようになるには」「中国語ができる」とは— 新沼 雅代 (竹野 洋子 記)

## 中国文化学会

◎大会

6月29日(土) 於 埼玉大学

[研究発表]

- ・孫綽の「遊天台山賦」について 文教大学大学院 秋元 俊哉
- ・張居正による『孟子』理解とその思想について 筑波大学大学院 佐藤 麻衣
- ・「效陶潛體」の意義と対自性—白居易「效陶潛體十六首並序」考— 筑波大学大学院 加藤 文彬
- ・李商隱の詩歌にみる文学と宗教のあいだ 文教大学 加固理一郎
- ・長尾雨山と呉昌碩 大妻女子大学 松村 茂樹
- ・旧抄本『論語義疏』の抄写字体が明かすこと 東京外国語大学名誉教授 高橋 均

[シンポジウム]

- ・古典教育のなかの漢文学—教科書と教材の視座から—  
パネリスト 大妻女子大学非常勤講師 木村 淳  
北海道教育大学旭川校 大橋 賢一  
埼玉大学 薄井 俊二  
司会・コーディネーター 千葉大学 加藤 敏

◎月例会

3月9日 大妻女子大学

- ・日本における『論語』受容の一斑 文教大学 渡邊 大
- ・元結の詩文における煬帝の形象 千葉大学 加藤 敏

5月12日 大妻女子大学

- ・瓦当の書風について 茨城県立八代台高等学校 安生 成美
- ・『論衡』と江戸漢学 福島大学名誉教授 大久保隆郎

12月14日 大妻女子大学

- ・陶淵明の「擬古」詩其七について

筑波大学大学院 宇賀神秀一

- ・「桃花源記」の創造性について

文教大学 坂口三樹  
(阿川 修三 記)

## 六朝学術学会

◎例会

3月16日(土) 第26回研究例会 於 県立広島大学

[報告]

- ・白道猷をめぐる聖賢伝承—天台山を初めて開いた人物について—

京都大学非常勤講師 佐藤 礼子

- ・晋宋の志怪と地方の伝承

奈良女子大学 大平 幸代

- ・都市の荒廃を描く文学—鮑照「蕪城賦」をめぐる—

広島大学 佐藤 大志

12月7日(土) 第27回研究例会 於 愛知大学

[報告]

- ・北宋の唐庚から盛唐の杜甫そして南朝梁の何遜へ—一句法から見た受容のありかた—

愛知大学 矢田 博士

- ・赤壁は何を以て実在するか

愛知大学 木島 史雄

- ・京都国立博物館所蔵敦煌道経小考

名古屋大学 神塚 淑子

◎大会

7月6日(土) 第17回大会 於 二松学舎大学

[報告]

- ・西晋の宗室統制の変遷と八王の乱の原因

青山学院大学院 島田 悠

- ・「桓山之悲」小考—「親子の別れ」か「兄弟の別れ」か—

香川大学 池田 恭哉

- ・『文選』序文と詩の六義—詩の伝統の継承と離反—

二松学舎大学 牧角 悦子

- ・「明胆論」に見る嵇康の思惟の原型

青山学院大学名誉教授 大上 正美

[記念講演]

- ・杜甫と前代の詩人たち

京都大学名誉教授 興膳 宏  
(大村 和人 記)

## 日本漢詩文学会

(〈宋元文学会〉から名称を変更)

◎第2回例会 (9月7日 於 共立女子大学)

- ・小曲演奏 共立女子大学 加藤 美紀

- ・陸九淵思想の再検討—いわゆる「六経註脚論」を中心に

学習院大学学長付国際研究交流オフィスPD 中嶋 諒

- ・漢文訓読法の教育はどうあるべきか

共立女子大学 加藤 美紀

- ・阿倍仲麻呂歌の「月」と唐詩

大妻女子大学 増野 弘幸

- ・現代日本文化と儒教—『ヒカルの碁』を一例に

國士館大学 松野 敏之

- ・映画『ROOKIES(ルーキーズ)』における漢文表現

高松・英明高等学校 田山 泰三

- ・『良斎文略』訳注完成報告

安積良斎生家当主 安藤 智重

◎活動

I 朱子絶句研究部門

『朱子絶句研究—『文集』巻5』を刊行(『共立女子大学総合文化研究所紀要』19号3-1、2月)。(松野 敏之、宇野 直人ほか)

II フランス中国学研究部門

アンドレ・レヴィ著『La littérature chinoise ancienne et classique(中国古典文学)』(クセジュ296)の和訳と注解作業が終了し、現在校正中。(中野 茂、宇野 直人)

III 近代漢詩研究部門

倉田貞美博士(元・香川大学)の著作の刊行を、主著『清末民初を中心とした 中国近代詩の研究』の復刊を含めて企画中。(倉田 定宣、田山 泰三)

(松野 敏之 記)

## 日本聞一多学会

◎大会

日本聞一多学会第17回大会

2013年7月20日(土) 14:00~17:30

二松学舎大学九段下キャンパス 11階会議室

- ・統修四庫全書提要編纂における橋川時雄の役割

群馬医療福祉大学 岡野 康幸

- ・「野草・我的失恋」再考

関東学院大学 鄧 捷

◎刊行物

『神話と詩』第12号(2014年3月)

(野村 英登 記)

国士館大学漢学会

◎第48回大会(12月21日) 於 34B205教室

[留学生帰朝報告]

・武漢大学留学を終えて 4年 河野 幸彦

[卒論発表]

・韓非子研究 4年 小川 工

[研究発表]

・山田方谷の論語講義について一門人資料を中心にして一  
二松学舎大学 菊地 誠一

[特別講演]

・学問のススメ 国士館大学非常勤講師 大場 一央

◎第2回詩文朗読コンテスト(12月21日) 於 34B205教室

・漢詩部門(白居易「長恨歌」) 1位 長屋 恵(1年)

・散文部門(莫言「講故事的人」) 1位 河野 幸彦(4年)

◎刊行物

・『国士館大学漢學紀要』第15号

(鷲野 正明 記)

日本漢文小説研究会

◎月例研究会 於 湯島聖堂斯文会館

5月12日

・室鳩巢『赤穂義人録』について 荒井 禮

7月21日

・漢文訳「移松記(ねびのまつのみ)」 荒井 禮

10月14日

・『近世叢談』について 内山 知也

・石崎又造と近代日本漢文小説研究 川邊 雄大

12月23日

・菊地三溪『八犬伝』翻訳「芳流閣格闘」 荒井 禮

(鷲野 正明 記)

明清文人研究会

◎月例研究会 於 湯島聖堂斯文会応接室

4月29日(月・祝)

・周道振・張月尊輯校『唐白虎全集』中国美術学院出版社  
2002年発行「年表」読解

・何大成刻本『唐白虎外編統刻』台湾学生書局所収の「詞」  
を読む① 荒井 禮

6月16日(日)

・周道振・張月尊輯校『唐白虎全集』中国美術学院出版社  
2002年発行「年表」読解

・何大成刻本『唐白虎外編統刻』台湾学生書局所収の「詞」  
を読む② 荒井 禮

9月15日(日)

・周道振・張月尊輯校『唐白虎全集』中国美術学院出版社  
2002年発行「年表」読解

・何大成刻本『唐白虎外編統刻』台湾学生書局所収の「詞」  
を読む③ 荒井 禮

・明清文人研究会編/内山知也監修『唐寅』編集会議

11月17日(日)

・周道振・張月尊輯校『唐白虎全集』中国美術学院出版社  
2002年発行「年表」読解

・何大成刻本『唐白虎外編統刻』台湾学生書局所収の「詞」  
を読む④ 荒井 禮

(河内 利治 記)

宋词研究會

◎詞籍提要譯注檢討會

8月9日(金)、10日(土) (於 日本大學商學部)

『四庫全書總目提要』「詞曲類」の譯注および檢討

◎『唐宋名家詞選』譯注檢討會

9月7日(土)、8日(日) (於 中京大學文化科學研究所)

龍榆生編『唐宋名家詞選』の譯注および檢討

◎小風絮會(『唐宋名家詞選』譯注)

1月12日(土)至12月21日(土)

(於 立命館大學文學部中國文學專攻共同研究室)

龍榆生編『唐宋名家詞選』の譯注および檢討

◎刊行物

『風絮』第九號(3月)

(萩原 正樹 記)

宋代詩文研究会

◎第17回宋代文學研究談話會(宋词研究会と共催)

2013年6月15日 於 早稲田大學早稲田キャンパス

I 蘇天爵『国朝文類』初探—宋末文人の収録狀況を中心  
に— 九州大學大学院 奥野新太郎

【蘇学小研討會 II~VI】

- II 論宋代「和陶歸去來兮辭」同題創作  
復旦大学大学院 李 棟
- III 蘇軾詩に見る「連作」の諸相  
東京大学大学院 加納留美子
- IV 道統&文統：北宋歐陽脩与蘇軾的文学觀念辨析  
台湾師範大学 王 基倫
- V 宋代仙溪家族傅氏的蘇軾研究  
南京大学 卞 東波
- VI “根本六經”与“通釈教”一錢謙益論“經緯史”与蘇軾  
文学的取法対象一  
南京大学 呉 正嵐
- VII 詩語としての「酪」一唐宋詩詞における比喩表現(二)一  
宮城教育大学 小田美和子
- VIII 「中調」「長調」考  
立命館大学 萩原 正樹
- IX 新組織「宋代文学学会」の設立に向けて  
大阪大学 浅見 洋二
- ◎第3回南宋江湖詩派国際シンポジウム(同科研費プロジェクトと共催)  
2013年11月23日 於早稲田大学早稲田キャンパス
- I 戴復古の謁客詩について一その修辞技法の特徴と干謁の実相一  
慶應義塾大学 阿部 順子
- II 江湖派と陸游・楊万里  
大阪大学 浅見 洋二
- III 嚴粲は朱熹の詩経研究をどのように受け継いだか?一『詩緝』所引朱熹詩説考一  
慶應義塾大学 種村 和史
- IV 僧詩、「晚唐体」と“江湖詩人”一從《聖宋高僧詩選》谈起一  
復旦大学 朱 剛
- V 劉克莊の鑑識眼一その詩文創作観との関係一  
九州大学 東 英寿
- VI 詩在“江湖”一被辺縁化的詩人和作為詩歌場域的“江湖”  
江漢大学 熊 海英
- VII 江湖与廟堂之間一晩宋詩歌的辺縁化及詩人群体的遊士化一  
香港中文大学 張 健
- ◎『江湖派研究』第3輯の刊行(2013年12月)  
(内山 精也 記)

## 中唐文学会

◎大會 於 秋田大學

10月11日

・唐代文學における妓女・女道士一「相思」の用例を遡って一  
横田むつみ

パネルディスカッション

・「譯注を語る、譯注が語る一出版と読書會のむかし・いま・あした一」

◎刊行物  
『中唐文學會報』第20号

(谷口 匡 記)

## 名古屋大学中国哲学研究会

◎研究会

第69回研究会(4月8日)

[研究発表]

- ・朱熹の忠恕解釈について 服部 寛風
- ・『老子』における「無為」と「自然」 水野 雅之

第70回研究会(5月21日)

[研究発表]

- ・『孝経啓蒙』にみえる道教の影響 石丸 羽菜
- ・『老子経通考』の林希逸批判について 李 麗
- ・「楽」の扱いから見る董仲舒の人間観 近藤めぐみ

第71回研究会(7月10日)

[『名古屋大学中国哲学研究論集』第12号合評会]

- ・張名揚著『喫茶養生記』の思想性とその体裁・構成 服部 寛風
- ・キング・ロバート著『Evolution of the Dao』 水野 雅之

第72回研究会(9月26日)

[研究発表]

- ・塚田大峰の思想について 小崎 智則
- ・『春秋』三伝の注に見られる「例」字の用法について 田中 千寿

第73回研究会(10月29日)

[卒業論文・修士学位論文中間発表]

- ・荀子の思想について 渡辺 浩二
- ・陳元賛『老子経通考』の研究 李 麗
- ・「楽」の扱いから見る董仲舒の思想 近藤めぐみ

第74回研究会(11月2日)

[第12回大阪大学・名古屋大学中国学研究交流会]

- ・清華簡『赤牘之集湯之屋』について一人物像と巫術性  
大阪大学大学院文学研究科博士後期課程 梶島 雅弘
- ・萬里集九『帳中香』中の『宋元通鑑』に就いて一禅林における研究方法の側面から  
名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程 大島絵莉香

・宋代禅宗の禅機に関する一考察一《碧巖録》の諸則を通じて一  
名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程修了 石野 幹昌

◎刊行物

『名古屋大学中国哲学論集』第12号(5月25日)

(小崎 智則 記)

### 名古屋大学中国文学研究室研究会

◎中部地区中国文学交流会—中国文学史の「変化」の局面—  
(愛知大学と共同開催)

7月6日(土) 於 愛知大学名古屋校舎

[講演]

- ・中国古典学の原点—中国古典学の過去・現在・未来  
愛知大学名誉教授 中島 敏夫
- ・転回する南宋文学—宋代文学は「近世」文学か?—  
早稲田大学教授 内山 精也

◎中国文学研究室研究談話会

6月21日(金)[卒論構想発表]

- ・『詩経』における表現の特徴について 鈴木 詩歩
- ・王羲之について 林 美江
- ・『文選』研究について 古川 愛子

6月28日(金)[研究発表]

- ・森春壽の悼亡詩 陳 文佳

7月12日(金)[卒論中間発表]

- ・劉向『列女伝』—前漢王朝の危機のなかでの君子たちへの示唆— 岩田 碧
- ・陶淵明「桃花源詩并記」 岡本 真依
- ・白居易の身体観と平安文学への影響 渡邊 光歩

8月4日(日)[特別講演]

- ・東亜漢文化圏中的《日本刀歌》  
南京大学副教授 金 程宇

10月18日(金)[研究発表]

- ・『左氏会箋』の五つの稿本 竹内 航治

11月7日(木)[卒論中間発表]

- ・劉向『列女伝』—前漢王朝の危機のなかでの君子たちへの示唆— 岩田 碧
- ・陶淵明「桃花源記」とその受容 岡本 真依
- ・白居易の白髪描写と平安文学への影響 渡邊 光歩

12月6日(金)[研究発表]

- ・市河寛斎著『半江暇筆』研究—『半江暇筆』と江湖詩社の詩人たち— 金 明蘭

◎刊行物

『名古屋大学中国語学文学論集』第25輯(9月 増刊号)

同 第26輯(12月) 電子テキスト。

名古屋大学中国文学研究室ホームページにて公開。

(竹内 航治 記)

### 京都大学中国文学会

◎講演会

2013年6月5日(水) 楽友会館1階会議室

- ・洛神賦：從傳說到文學、歴史、繪畫  
復旦大学 戴 燕

◎第28回例会

2013年7月20日(土) 京都大学文学部棟新館第7講義室

- ・『三幅書』について 大阪大学 山本 孝子
- ・明代夢文化研究のパースペクティブ  
大阪府立大学 大平 桂一
- ・傑作の理由—漢詩もまた編集である—(教員養成大学の授業より)  
滋賀大学 亀山 朗

◎刊行物

『中國文學報』第83冊「杜甫専号」(2012年10月付)

(木津 祐子 記)

### 中國藝文研究會

◎合評會及び研究會

4月14日(日) 研究會(立命館大學國際平和ミュージアム  
二階會議室)

- ・左思の詠史詩について 片野 朱夏
- ・杜甫の交友 田中 京
- ・李清照詞の研究 靳 春雨
- ・馮夢龍と黃圖珮のあいだ—白蛇傳變遷史(四)—  
谷口 義介
- ・「中調」「長調」考 萩原 正樹

8月18日(日)研究會 (立命館大學國際平和ミュージアム  
二階會議室)

- ・『六韜』諸本と銀雀山殘簡 石井眞美子
- ・蘇軾「江神子(乙卯正月二十日夜記夢)」詞の受容と評價  
について 池田 智幸

9月15日(日) 研究會(立命館大學國際平和ミュージアム  
二階會議室)

- ・北大漢簡『老子』と嚴本『老子』について 村田 進
- ・國立公文書館藏『新刊五百家註音辨唐柳先生文集』の書き入れについて 一卷四十二・四十三「古今詩」を手掛かりとして  
路 璐
- ・蘇軾「江神子」詞諸篇の受容と評價について  
池田 智幸

◎刊行物

『唐代思想史論集』島一著(1月)

『學林』第56號(1月)  
『學林』第57號(8月)

(山内 貴 記)

### 東山之會

◎研究發表 於 京都女子大學

2月23日

・唐代郊廟歌辭研究序説 加藤 聰

3月23日

・王十朋の目に映じた韓愈 齋藤 茂

4月27日

・前漢初期の思想文獻における、先秦道家の文體的影響  
に關する一考察—莊子・陸賈・賈誼・司馬談の場合—  
鈴木 達明

9月21日

・中國中古書論の研究・序説 成田健太郎

11月9日

・西晉樂府歌辭研究 一澤 美帆

12月14日

・『詩經』の味覺表現 稻垣 裕史

◎『長江集』譯註(2月23日至12月14日)

卷一「易水懷古」至卷二「明月山懷獨孤崇魚琢」

(愛甲 弘志 記)

### 阪神中哲談話會

第396回例会(特別研究発表大会)

5月18日 於 奈良教育大學

- ・『孟子』と『性自命出』—その「心」の差異をめぐって  
末永 高康
- ・中国古代における「天」の相對化 菅本 大二
- ・豫讓復讐物語考—思想史研究の立場から 工藤 卓司
- ・中国古代思想研究と甲骨学 末次 信行
- ・韓非子の政治理論は荀子から出たのか?—『韓非子』、  
『荀子』の「性」概念と人間觀の比較より 佐藤 将之
- ・全体討論「中国古代思想研究は今、何を明らかにするべきか」  
進行 橋本 昭典  
討論 末永 高康、菅本 大二、  
工藤 卓司、末次 信行、  
佐藤 将之

・橋本敬司先生を偲ぶ會

第397回例会 9月14日 於 茨木市福祉文化會館

・良知説・女性・聖人—陽明学のパラドックス

陳 曉傑

第398回例会 11月30日 於 茨木市市民會館

・『春秋穀梁伝』の「無説」をめぐって 田中麻紗巳

(橋本 昭典 記)

### 大阪大学中国学会

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/chutetsu/xuehui/index.htm>

(事務局は大阪大学文学研究科中国哲学研究室)

◎刊行物

『中国研究集刊』第56号〔號号〕(2013年6月)刊行。

『中国研究集刊』第57号〔巨号〕(2013年12月)刊行。

◎國際學術交流

平成26年1月22日、大阪大学待兼山會館特別室において、曹方向氏(安陽師範學院文學院講師)による學術講演会、「戰國文字中的「京」及相關問題」を開催した。

(湯浅 邦弘 記)

### 懷德堂研究会

(事務局は大阪大学文学研究科中国哲学研究室)

◎研究会合

第13回研究会 平成25年9月9日

大阪大学附属図書館・大阪大学文学部中庭會議室

大阪大学附属図書館懷德堂文庫を視察し、その後研究会を開催した。

- ・「拙論「幕末懷德堂の陵墓調査」に關する補足」  
矢羽野隆男
- ・「懷德堂学派の「異端」の説」  
湯浅 邦弘
- ・「西村天因書簡について—概要と現状—」  
池田 光子

第14回研究会

平成25年12月15日 大阪大学文学部中庭會議室

- ・「北京人民大學シンポジウムの報告」  
岸田 知子
- ・「五井蘭洲と津輕藩」  
寺門日出男
- ・「中井竹山がめざしたもの」  
藤居 岳人
- ・「『懷德堂纂録』とその成立過程」  
竹田 健二
- ・「並河潤菊家傳遺物目録について」  
矢羽野隆男・池田 光子
- ・「台湾大學で開催された「第四届日本研究年會」の報告」  
湯浅 邦弘

◎国際学術交流

平成25年11月8日～9日

第四回日本研究年会国際学会「国際日本研究の可能性を探る」(台湾大学)に湯浅邦弘、前川正名、佐野大介、黒田秀教が出席し、研究発表を行った。

- ・「懐徳堂学派の『論語』解釈―「異端」の説をめぐって―」  
湯浅 邦弘
- ・「橋本左内の「忠」観―漢詩を中心に―」  
前川 正名
- ・「孝としての近親相姦」  
佐野 大介
- ・「日本古代における祖先祭祀と神観念」  
黒田 秀教

◎公開講演会

平成25年12月14日

「歴史資料のデジタルアーカイブ―WEB懐徳堂公開10周年記念講演会―」と題する公開講演会を、中之島フェスティバルタワー二十四階PLAZA21 KANSAI シアター24 にて開催した。

- ・「大阪大学懐徳堂文庫の歴史」  
湯浅 邦弘
- ・「WEB懐徳堂の果たした役割とこれから」  
末吉 敬子  
(湯浅 邦弘 記)

中国出土文献研究会

(平成22年10月より戦国楚簡研究会を改称。事務局は大阪大学文学研究科中国哲学研究室)

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/chutetsu/sokankenkyukai/index.html>

◎研究会合

第52回研究会 平成25年8月27日

上海新協通国際大酒店(中国上海)第三会議室

- ・劃線小考―北京簡『老子』と清華簡『繫年』とを中心に―  
竹田 健二
- ・上博(九)『史記問於夫子』小考  
福田 哲之
- ・香港中文大学文物館藏簡牘實見調査報告  
草野 友子
- ・簡帛『老子』諸本の系譜学的考察  
福田 哲之
- ・上博楚簡『靈王遂申』初探  
福田 一也

第53回研究会 平成25年8月29日

鄭州中州国際飯店(中国河南省)会議室

- ・上博楚簡『成王為城濮之行』の構造とその特質  
草野 友子
- ・清華簡『説命』の文献的特質―天の思想を中心に―  
金城 未来

第54回研究会 平成25年12月21～22日

島根大学教育学部五一九研修室

- ・上博楚簡『靈王遂申』にみえる滅国  
福田 一也
- ・上博楚簡『成王為城濮之行』の内容と構成  
草野 友子
- ・清華簡『周公之琴舞』研究状況紹介  
金城 未来

◎国内研究発表

平成25年12月7日

中国出土資料学会第二回例会(成城大学)において、草野友子が「上博楚簡『成王為城濮之行』の内容と構成」と題して研究発表を行った。

◎国際学術交流

平成25年3月～8月

竹田健二が台湾奨助金により、台湾大学訪問学者として在外研究を行った。

平成25年4月21日、大阪産業大学梅田サテライトキャンパスにおいて、中国古算書研究会(代表:張替俊夫教授)と中国出土文献研究会の共同主催で、陳偉教授(武漢大学歴史学院院長、兼同大学簡帛研究中心主任)による学術講演会、「里耶秦簡から見た秦代行政と算術」を開催した。

平成25年5月3日～4日、台湾国立中正大学で開催された「第二十四届中国文字学国際学術研討会」において、福田哲之が「關於浙江大學藏戰國楚簡《左傳》字體的疑點」と題する研究発表を行った。

平成25年5月9日、湯浅邦弘・竹田健二・草野友子・金城未来が香港中文大学を訪問し、「香港中文大学藏簡牘」を実見した。また、湯浅邦弘が「上博楚簡〈舉治王天下〉的古聖王傳承」と題して講演を行った。

平成25年5月10～11日、香港城市大学において開催された「第五回東アジア文化交渉学会」に湯浅邦弘・竹田健二・草野友子・金城未来が出席し、研究発表を行った。

- ・「岳麓秦簡『占夢書』研究」  
湯浅 邦弘
- ・「清華簡『楚居』の劃線・墨線と竹簡の排列」  
竹田 健二
- ・「上博楚簡《成王為城濮之行》初探」  
草野 友子
- ・「清華簡『説命』初読」  
金城 未来

平成25年5月27日、台湾・台湾大学哲学系で、竹田健二が「關於兵家の氣思想―以「孫氏之道」為中心」と題する講演を行った。

平成25年6月25～26日、台湾・台湾大学中文系で「先秦

兩漢出土文獻與學術新視野國際研討會」が開催され、湯浅邦弘・竹田健二が出席、研究発表を行った。

- ・「上博楚簡『舉治王天下』の堯舜禹傳說」 湯浅 邦弘
- ・「清華簡《楚居》的劃線、墨線與竹簡の排序問題」 竹田 健二

平成25年7月11～12日、敦煌太陽大酒店・敦煌研究院にて開催された、「二〇一三年中文数字出版与数字図書館国際研究会(CDPDL)」に湯浅邦弘・草野友子・金城未来が出席し、研究発表を行った。

- ・「书簡与扇的数字图书馆—大阪大学怀德堂文库の相关措施—」 湯浅 邦弘
- ・「日本汉籍数码图版的公开状况及其意义」 金城 未来
- ・「學術網站與与中国出土簡牘研究」 草野 友子

平成25年7月26日、台湾・致理技術学院で「第五届東亞漢学研究者之会」が開催され、竹田が「劃線小考—北京簡『老子』と清華簡『繫年』とを中心に—」と題する講演を行った。

平成25年8月27日、研究会メンバー全員で上海博物館を訪問し、葛亮研究員と面談。上博楚簡について意見交換した後、同館所蔵の青銅器について詳細な解説を受けた。

平成25年8月31日、研究会メンバー全員で安陽師範学院を訪問。「漢字文化体験中心」にて、多数の甲骨文を実見し、甲骨文の拓本実演も参観した。

平成25年10月19日～20日

「簡帛文獻与古代史」學術研討会・第二屆出土文獻青年学者論壇(復旦大学)に草野友子・金城未来が出席し、研究発表を行った。

- ・「上博楚簡《成王爲城濮之行》的内容與結構」 草野 友子
- ・「清華簡《説命》的文獻特質—以天的思想爲中心」 金城 未来

平成25年10月25日～26日

「簡帛『老子』与道家思想」國際學術研討会(北京大学中国古代史研究中心報告庁)に湯浅邦弘・福田哲之・竹田健二が出席し、研究発表を行った。

- ・「北大簡《老子》的性質—結構、文章及詞彙—」 湯浅 邦弘
- ・「簡帛《老子》諸本的系譜學考察」 福田 哲之
- ・「劃線小考—以北京簡《老子》與清華簡《繫年》爲中心—」 竹田 健二

平成26年1月14日、湯浅邦弘が安徽省の阜陽博物館を訪問し、阜陽漢簡の整理にあたられた韓自強元館長、張文館長らと会談した。また、翌15日、上海博物館を訪問し、上博楚簡を実見するとともに、葛亮研究員と会談した。

(湯浅 邦弘 記)

## 中国中世文学会

◎平成25年度研究大会

10月26日 於 広島大学文学研究科

- ・劉孝綽「酬陸長史陸倕」詩について—陸倕「以詩代書別後寄贈」詩との関わりから— 佐伯 雅宣
- ・「柳毅伝」小考—唐代龍説話に見られる「信義」をめぐる— 屋敷 信晴
- ・歐陽脩の『洛陽牡丹記』について 渡部 雄之
- ・沾上題襟集と韓江雅集—清代地方詩社の特色と作品— 市瀬 信子
- ・荻生徂徠の「雅」と「俗」 武内 真弓

◎例会 於 広島大学文学研究科

11月28日

- ・『夷堅志』の虎の話について 本間 貴博

◎刊行物

『中国中世文学研究』第62号(9月)

(富永 一登 記)

## 広島大学中国文学研究室研究会

第176回 2月15日

[卒業論文最終発表会]

- ・六朝書論の研究 志田 乙絵
- ・六朝志怪から唐代伝奇への展開—変化の術を中心として— 松崎 未紗
- ・杜甫李白交友詩—友人と古人— 堀中 美里
- ・歐陽脩の古文「記」に関する研究 渡部 雄之

第177回 6月24日

[修士論文中間発表]

- ・梅堯臣詩研究 大井 さき
- ・「三言二拍」の地名とテーマの研究—杭州を中心として 徐 冬萍

[修士論文構想発表]

- ・六朝・唐代の書論の研究 志田 乙絵
- ・欧陽脩『洛陽牡丹記』について 渡部 雄之

第178回 7月26日

[修士論文最終発表会]

- ・六朝志怪小説にみえる仏教説話の研究 本間 貴博

[卒業論文中間発表I]

- ・『水滸伝』から『金瓶梅』へ 大下祐紀子
- ・『聊齋志異』に見られる蒲松齡の怪異観 岡本健太郎

第179回 11月29日

[卒業論文中間発表II]

- ・『水滸伝』から『金瓶梅』へ 大下祐紀子
- ・『聊齋志異』に見られる蒲松齡の怪異観 岡本健太郎

第180回 12月20日

[修士論文構想発表]

- ・遠山荷塘と『諺解校注古本西廂記』研究 樊 可人

[修士論文中間発表]

- ・「二拍」の編纂意図 徐 冬萍
- ・『現代漢語描写語法』翻訳に当たって 小山佐和子

◎刊行物

『中国学研究論集』第30号(4月)

『中国学研究論集』第31号(12月)

(富永 一登 記)

広島大学中国思想文化学研究室研究会

第186回研究会 2月12日

[卒業論文発表会]

- ・『荀子』の「天」について 佐藤 和俊
- ・元朝と許衡の「朱子学」 飯富 裕子

第187回研究会 5月30日

[卒業論文中間発表会]

- ・土禍と陶山書院一出处進止に見る李退溪の人物と学風— 松古 真一

第188回研究会 8月9日

[卒業論文発表会]

- ・土禍と陶山書院一出处進止に見る李退溪の人物と学風— 松古 真一

第189回研究会 11月21日

[卒業論文中間発表会]

- ・欧陽脩の「正統論」について 望月 勇希
- ・江戸時代の儒学における職業倫理の特性—石田梅岩を中心として— 日下 理

[修士論文中間発表会]

- ・緯書成立の研究 藤田 衛
- ・中国古代書論研究—隸書という呼称を中心に— 高田 哲治

◎刊行物(発行人 東洋古典学研究会)

『東洋古典学研究会』第35集(5月)

『東洋古典学研究会』第36集(10月)

(市來津由彦 記)

山口中国学会例会

2013年12月21日(土) 人文学部小講義室

◎研究発表

- ・長州藩教育の源流—徂徠学者・山県周南—

山口中央高校 牛見 真博

◎講演

- ・江戸時代における『金瓶梅』の受容

広島大学 川島 優子

(根ヶ山 徹 記)

第59回中国四国地区中国学会大会

6月1日(土) 開催校:愛媛大学 会場:愛媛大学城北キャンパス

[研究発表]

- ・日本中世禅林における柳宗元詩受容の一側面—五山版の書き入れをめぐって— 愛媛大学 太田 亨

- ・中国・台湾の映画に見る障害者へのまなざし

愛媛大学 宮田さつき

- ・富へのまなざし—『続玄怪録』所収の物語をめぐって

高知女子大学 高西 成介

- ・敦煌講唱体文献の生成と縁起類の関わりについて

広島大学 高井 龍

- ・杜甫と書法—杜甫が好んだ「瘦硬」なる書とはどのようなものなのか— 安田女子大学 内田 誠一

- ・包天笑と『留芳記』 岡山大学大学院 藤本菜美子

[講演]

- ・中国仏教史研究と遺跡調査 愛媛大学 邢 東風

(諸田 龍美 記)

## 九州中国学会

◎平成25年度(第61回)九州中国学会大会 5月11、12日

於 琉球大学

5月11日

- ・『封神演義』における鍾伯敬評の検討 岩崎華奈子
- ・日本漢文小説における『虞初新志』 柯 混瀚
- ・琉球士人の漢籍学習について—書き入れの状況にもとづく考察— 水上 雅晴
- ・都々逸・琉歌・雲南白族の民間歌謡の関係から考える—三弦・三線・三味線を媒介として— 甲斐 勝二

5月12日

- ・唐玄宗兄弟「五王」とその宮廷音楽文化 劉 潔
- ・江湖詩派における晩唐体詩風—楊万里の影響に着目して— 李 祥
- ・蘇東坡の詠月詩—兄弟を偲ぶ月 原田 愛
- ・メドハーストの『華英字典』から見た19世紀の中国語音 山口 要
- ・顧頡剛の疑古学説と同時代日本の諸説との比較 竹元 規人
- ・張君勱の『比較中日陽明学』と日本陽明学 鄧 紅

◎刊行物

『九州中国学会報』第51巻(2013年5月)

(中里見 敬 記)

## 九州大学中国文学会

◎中国文藝座談会

第264回 2月2日

- ・敦煌変文における伍子胥とその家族 鈴木 裕亮
- ・杜甫「秋興八首」の解釈をめぐって 永江 健太
- ・馮夢龍『笑府』の分類について 山口 綾子
- ・白氏新樂府「七德舞」考 静永 健
- ・日本と中国における『椿姫』の翻訳—同時代東アジアの文脈から見た林訳小説 中里見 敬

第265回 3月2日

- ・杜甫「旅夜書懷」創作時期の再検討 張 宇超
- ・「処州孔子廟碑」にみえる韓愈の道統観 趙 二超
- ・台湾国家図書館所蔵『新雕白氏六帖事類添注出経』について 大淵 貴之
- ・『白氏長慶集』中「古調詩」と「古体詩」之関係 杜 曉勤

第266回 4月27日

- ・開元「五王」と唐代音楽文化 劉 潔
- ・明末の出版と小説批評—『封神演義』鍾伯敬評を中心に— 岩崎華奈子
- ・友悌の詠月詩—杜甫から蘇軾へ 原田 愛
- ・南宋出版文化と中間層文人—王十朋『会稽三賦』史鈔注を例として— 甲斐 雄一

第267回 7月27日

- ・陳冷血の翻訳小説『生計』に対する一考察 国 蕊
- ・左思「三都賦」と西晋司馬政權 栗山 雅央
- ・元稹の家系と彼の十代の詩作について—十六歳の作「代曲江老人百韻」を中心に— 長谷川真史

第268回 9月21日

- ・張愛玲と漢奸疑惑—「華麗縁」を中心に— 橋本 結花
- ・明代小説における批評と評者—李卓吾評と鍾伯敬評をめぐって— 岩崎華奈子
- ・近世日本における中国琴学の需要について 中尾友香梨

- ・藝術化的徳運与符讖学説—兼談く拾遺記)整理中の相關問題— 林 嵩

第269回 「心をつなぐ目加田誠と漢籍—大野城市所蔵の目加田文庫について—」

11月17日 於 大野城市まどかぴあ・3F大会議室

- ・漢代画像石と語り物文芸 柳川 順子
- ・目加田文庫の創設について 舟山 良一(大野城市)
- ・中国文藝座談会(目加田誠主宰)と目加田文庫(漢籍)について 竹村 則行
- ・目加田誠先生の思い出 松崎 治之

第270回 12月14日

- ・七夕伝承とその文学 梅田 未来
- ・洞庭湖を見た唐代の詩人たち 江崎 巧
- ・文同の芸術観 井上枝里子

◎刊行物

『中国文学論集』第42号(12月)

(奥野新太郎 記)

## ❖ 委員会報告

### 論文審査委員会

委員長 富永 一登

#### ○学会報第66集応募論文の審査の経緯

2014年1月20日締め切りの応募論文は全37編(哲学・思想部門10編、文学・語学部門22編、両分野での審査希望2編、日本漢学部門3編)であった。1月25日に論文審査委員会を開催し、論文1編につき3名の査読委員(論文審査委員会委員1名を含む)を決め、査読委員となった論文審査委員会委員が閲読委員を兼ねることとした。依頼論文2編の閲読委員も決定した。

3月29日開催の論文審査委員会(神塚副理事長陪席)で、査読委員3名の査読結果をもとに、哲学・思想部門4編、文学・語学部門11編、日本漢学部門1編の計16編の掲載を決めた。

#### ○その他、3月29日の論文審査委員会での審議決定事項

- ・学会報第67集依頼論文執筆候補者2名を決定し、理事会に推薦することとした。
- ・文学語学部門から1名の学会賞候補者を決定し、理事会に推薦することとした。あわせて、受賞理由執筆者を決めた。
- ・平成26年度日本学術振興会奨励賞推薦者については見送ることとし、理事会に報告することとした。
- ・理事会と出版委員会の依頼をもとに、以下の三点について審議決定した。

- (1)学会報掲載論文の頁数を閲読委員が確認し、校正段階での加筆分量のチェックを編集担当校と連携して行うこととした。
- (2)学会報掲載論文の校正は再校までとし、三校は印刷会社から要請があった場合に限ることを執筆者に徹底することにした。
- (3)抜刷の執筆者負担金は、事前に印刷会社に納付することを抜刷申込者に通知することとした。

### 選挙管理委員会

委員長 土田健次郎

#### 1. 評議員の一部交替

平成26年(2014年)3月31日に評議員1名が評議員定年を迎えたため、下記のように平成24年に実施された評議員選挙の結果に基づき1名の会員が繰り上げ当選となった。任期は平成26年4月1日から平成27年3月31日まで。

○退任の評議員 井波 律子 会員

○後任の評議員 稀代麻也子 会員

なお退会を申し出ている評議員が1名あるが、この件に関しては、平成26年6月に予定されている理事会でその退会が承認された場合、平成24年に実施された評議員選挙結果に基づき、1名が繰り上げ当選となる。

#### 2. 平成27・28年度役員選挙

本年度(平成26年度)は役員選挙の年となる。だいたいの日程はすでに先号(2013年第2号)の『日本中国學會便り』に記してあるが、その皮切りとしてまず本年5月24日に評議員選挙の選挙用紙の発送作業を行う予定である。ふるって投票されることをお願いしたい。

## ❖ 事務局より

### ◎住所変更と名簿への掲載について

住所・所属機関等の変更は、速やかに事務局までご通知ください。通知は、メール、郵便、ファックス、振替用紙通信欄にてお願いします。

10月発行の会員名簿には、8月末までにお知らせいただいた会員情報を掲載させていただきます。それ以降の変更については次年度に掲載となりますので、ご了承ください。

なお、従来、「会員名簿」には固定電話番号(自宅または勤務先)のみを掲載しておりましたが、昨年度から携帯電話番号も掲載できることといたしました。携帯番号を名簿に掲載することを希望される場合は、事務局までご一報願います(ご本人からのお申し出がない限り、既にご登録いただいている携帯番号を名簿に掲載することはありません)。



### 訃報

昨年度『学会便り』第2号発行以降、以下の方々のご逝去の報が届きました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

(敬称略)

石川三佐男	(関東地区)	2014年2月7日
黒須重彦	(関東地区)	2014年2月24日
鈴木喜一	(近畿地区)	2014年1月8日
花崎隆一郎	(近畿地区)	2013年7月5日

# 第66回大会開催のお知らせと研究発表の募集

会員各位

陽春の候、会員各位におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、日本中国学会第66回大会は大谷大学が準備を担当し、本年10月11日(土)、12日(日)の両日に大谷大学で開催することになりました。

つきましては、下記の要領で研究発表を募集致します。奮ってご応募下さいますようお願い申し上げます。

2014年4月吉日

日本中国学会第66回大会準備会代表

乾 源俊

記

1. 部会 : 一、哲学・思想  
二、文学・語学  
三、日本漢文(日本漢学・日本漢詩文・漢文教育など)
2. 時間 : 発表 20分 質疑応答 10分
3. 締め切り : 6月30日(月)(当日消印有効)
4. 郵送宛先 : 〒603-8143 京都市北区小山上総町  
大谷大学 中国文学会  
日本中国学会第66回大会準備会 乾 源俊宛

◎本年は、一、哲学・思想 二、文学・語学 三、日本漢文の三部会を予定しておりますが、応募状況によって調整することも考えております。

◎発表は、学術研究の最新の成果で、未公開のものに限ります。発表ご希望の方は、氏名(フリガナ・所属)・希望発表部会・連絡先メールアドレスを明記の上、印字した発表題目および概要(800字以内、併せてテキスト形式の電子ファイルを添付。但し電子ファイルについては、メールによる提出も可)を、締切日までに大会準備会宛にお送りください。なお執筆者による校正はありませんので、完全原稿をお願いします。

また、応募者多数の場合は、やむを得ずご発表をお断りすることもございますので、ご了承ください。

【問合せ先】 E-mail: [inui@res.otani.ac.jp](mailto:inui@res.otani.ac.jp)  
TEL: 075-432-3131(大谷大学代表)